

4554 富士製薬工業

今井 博文 (イマイ ヒロフミ)

富士製薬工業株式会社代表取締役社長

厳しい企業間競争の中、主力製品好調により売上を伸ばす

◆2013年9月期第2四半期連結累計期間業績

2013年9月期第2四半期連結累計期間の業績は、売上高119億96百万円、営業利益16億9百万円、経常利益17億34百万円、四半期純利益10億88百万円となった。主力製品である診断用薬とホルモン剤が好調に推移したことに加え、タイ子会社3ヶ月分の売上高4億36百万円の上乗せもあり、売上を押し上げた。売上総利益率は、連結で43.7%、単体で44.5%と前年同期より0.9ポイント改善している。

単体営業利益は、売上増加に伴う売上総利益の増加などにより、前年同期比で6億73百万円増加し、16億47百万円となった。連結営業利益は、研究開発費の未消化などにより、上期予想を79百万円上回る16億9百万円となった。

薬効別売上高は、診断用薬においてオイパロミンが33億73百万円(前年同期比5億73百万円増)、イオパークが9億77百万円(同2億37百万円増)となり、診断用薬合計で46億22百万円(同8億19百万円増)となった。ホルモン剤については、ルナベル配合錠12億29百万円(同2億31百万円増)、ファボワール錠1億30百万円(同84百万円増)などが好調に推移し、ホルモン剤合計で37億28百万円(同5億40百万円増)となった。

2013年9月期通期連結業績予想については、売上高は上期実績119億96百万円に下期予想139億79百万円を加え、259億75百万円を見込んでいる。利益面については、営業利益35億75百万円、経常利益35億40百万円、当期純利益21億90百万円の見込みである。

◆安定した財務内容

連結貸借対照表では、総資産が388億33百万円、純資産合計が234億37百万円となり、自己資本比率は60.4%となった。資産の部においては、流動資産が235億58百万円となり、主な内訳は受取手形および売掛金99億10百万円、現金および預金49億1百万円である。固定資産は152億74百万円となり、主な内訳は建物及び構築物48億16百万円、OLIC社買収に伴うのれん32億99百万円である。OLIC社買収に伴うのれんについては、12年償却を予定している。負債の部においては、流動負債は87億97百万円となり、主な内訳は支払手形および買掛金41億35百万円である。固定負債は65億97百万円で、主な内訳は長期借入金48億78百万円である。

キャッシュフローについては、当第2四半期連結会計期間末の現金および現金同等物は54億6百万円となった。営業活動によるキャッシュフローは、利益増加や売上債権の減少などにより9億13百万円の収入となった。投資活動によるキャッシュフローは、OLIC社買収に伴う株式取得による支出や研究開発棟の建設や富山工場第五製剤棟の第Ⅱ期工事による有形固定資産の取得による支出などにより、57億88百万円の支出となった。財務活動によるキャッシュフローは、長期借入などにより45億32百万円の収入となった。

なお、今期は連結初年度に当たるため、前年同期の数値およびこれに係わる前年同期増減率等の比較はお示ししていない。

◆中期ビジョンに向けた取り組み

中期ビジョンでは、「2015年(設立50年)までに、既存コア事業の拡大と次の時代につなぐ新規事業機会の具体化を実現すること」を重点課題としている。この中期では、ジェネリック医薬品と新薬のシナジーモデルを構築すること、海外での事業展開を推進すること、新たなアライアンスを具体化すること、この3つを通じて更なる成長を図っていく。また、特定の疾患領域の医療現場から強い信頼と支持を得て、持続的に大きな貢献を果たしていくことを目指す。

当社の2015年の姿として、まず、新たな注射剤を軸に急性期医療事業を拡大させる。このため、がんの診断の主力造影剤から今月発売を予定しているバイオシミラーを中心にがんの治療へ対象領域を拡大するとともに、「Gx プラス」(臨床開発が必要な付加価値ジェネリック医薬品)、DDS 製剤、D&D(ドラッグとデバイスの組み合わせ)製剤など抗がん剤の充実を図っている。次に、女性医療のリーディング・カンパニーを実現させる。現在、産婦人科領域でホルモン領域の全てをサポートする体制を整備するとともに、ジェネリック医薬品とブランド薬のシナジーモデル構築に努めている。また、研究開発を中心にした事業運営体制の構築を目指すために、本年4月に富山研究開発センターを立ち上げた。中長期の開発パイプラインのさらなる充実を図っていく。さらに、海外での事業展開を推進し、新たなジェネリック医薬品の競争優位を築くため、現在、タイ子会社において新たな展開の具体化に取り組んでいる。

重点課題への具体的な取り組みとして、既存のコア事業については、現在、女性医療と急性期医療の長期収載ブランド薬承継を協議中である。新たな事業機会の具体化においては、バイオシミラー・フィルグラステム BS 注シリンジ「F」の製造販売承認を取得し、本年5月末頃に上市できる見通しとなった。さらに、抗がん剤注射剤製造ラインを構築し、本年10月の本稼働を予定している。海外での事業展開については、タイで日本を含めたアジア向け注射剤の主力工場を2014年を目途に新設することを検討している。また、国内外製薬企業と新たなアライアンスを検討中である。

中期経営計画としては、2015年9月期に売上高320億円、営業利益52億円、経常利益52億円、当期純利益33億円の達成を目指す。なお、配当は2014年9月期より連結の配当性向30%をめどとして高めていきたいと考えている。

◆質疑応答◆

フィルグラステムについて、現時点(平成25年5月17日現在)での手ごたえを伺いたい。

現在、今月末の薬価収載に向けてクロージングの段階に入っている。各エリアにおいて、大学病院など影響力のある施設に絞り込んで活動してきたため、採用の確度が高くなると考えている。われわれがターゲットとしている施設の中で見通しが立っているところはまだ限られているが、今後も営業活動に注力していく。

血液がんと固形がんで診療科による反応の違いは見られるのか。

固形がんと比較すると、血液がんを扱う血液内科との関係づくりはハードルが高いという認識であるが、現在、血液内科との関係構築に注力している。

タイ工場は海外市場向けのみで、日本市場向け製品を製造する予定はないのか。

東南アジアのほか、日本向け製品の製造も計画している。

タイ工場の規模はどのくらいか。

今後の設計において変動するが、規模感としては15億円程度の投資を考えている。

リュープリンのジェネリック医薬品について進捗状況を伺いたい。

年内の治験開始に向けて、現在準備中である。治験規模についてもある程度固まってきている段階である。

OLIC 社は注射剤のみを製造しているのか。また、顧客層について伺いたい。

OLIC 社のメインは経口剤と軟膏剤であり、注射剤の占める割合は非常に少ない。第 2 四半期の売上も経口剤と軟膏剤が中心である。既存顧客は欧米の大手製薬会社の現地法人が多く、販売先はタイおよび東南アジアが中心である。

OLIC 社の通期予想が上振れする可能性はあるのか。

期首の段階では OLIC 社の 1 月～6 月の 6 ヶ月分をそれぞれ 3 ヶ月遅れで今期に取り込む予定であったが、タイ国内の会計年度との兼ね合い等により 3 ヶ月遅れではなく同じ期間の業績を反映させることとなったため、取り込む期間が 6 ヶ月から 9 ヶ月となり、期首の想定からは増加しており、通期予想としては 14 億 36 百万円である。中期経営計画における予想、2014 年 9 月期 17 億 50 百万円、2015 年 9 月期 20 億円については変更はない。

中期ビジョンについて、バイオシミラーに関する具体的な計画を伺いたい。

海外企業との間でライセンスを正式に締結後、開示させていただきたい。

他の製薬企業との戦略的アライアンスについて、具体的な案件は出ているのか。

既に出ており、現在、具体化に向けて協議中である。

売上高の予想値未達の要因と、研究開発費未消化について下期見通しを伺いたい。

上位 15 品目において売上未達のものがあり、15 品目合計で約 1 億円計画を下回ったことである。そのほかの製品における未達を加え、合計で 3 億円強の未達となった。研究開発費の未消化については、下期において解消される見通しである。

ルナベル配合錠の伸びが第 2 四半期に急速に鈍化している要因は何か。

第 1 四半期にルナベル配合剤の拡販キャンペーンに取り組んだことにより、売上が計画を大幅に上回った。その反動により、第 2 四半期の伸びが減少した形となった。

(平成 25 年 5 月 17 日・東京)

* 当日の説明会資料は以下の HP アドレスから見ることができます。

http://www.fujipharma.jp/ir/library/meeting_data.html